

週報

こひつじ

第39巻 46号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

わたしが去るのは益

しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたにとって益なのです。(ヨハネ一六の七)

その一 神の祝福の意外性

「まもなく私は去ってゆく」
 イエスのこの言葉は大きな衝撃を弟子たちに与えた。

そんな言葉をイエスから聞くと、弟子たちの計算にないことだった。彼らは思っただろう。

「今、イエスに去られては、いつか。イエスは神の国を建設するために来られたのではなかったか。そしてそれが完成したら、すべてを捨てて従ったわれわれに荣誉ある地位を与えてくださるはずでは

この言葉から学ぶ第一は、神の

祝福は常に意外性を持っているということだ。

神の祝福は、われわれの計算の外にある。われわれにとって損とすることが実は益なのだ。それが神の祝福の性質である。

われわれは、ある事実に突然直面して、ああ、不幸なことになってしまったと嘆く。そしてこの先、どうしたらよいかと悩む。

ところが、われわれにとって悲しみであり、不幸であり、損であることが、神の側から見ればわれわれの益であると言われているのである。

では、弟子たちの場合、イエスが去られることは、どういう意味で益だったのか。

イエスが去ってのち、弟子たちに起こった大きな出来事がある。それは、もうひとりの助け主である聖霊の降臨だ。そしてその聖霊によってイエスは弟子たちのうちに住まわれるようになったのである。

イエスが地上におられる間は、弟子たちはいつもイエスといっしょにいられるわけではなかった。

イエスはその肉体のゆえに時間的、空間的制約を受けておられたからである。

しかし聖霊によって弟子たちのうちに住まわれるとき、もはやその制約はない。弟子たちがどこへゆこうともイエスは彼らとともにいてくださる。それは「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ二八の二〇) という約束の成就だった。

目に見えるものがある限り、私たちはいつもそれに依存する。神の像を造ると、祈るためにその像が必要となる。荘厳な神殿を建てると、神を礼拝するにはそこへゆかなければならないと考える。

しかしイエスが目に見えなくなると、弟子たちは、神の像も神殿も宗教制度もぜんぶ不要となった。なぜなら目には見えないが、彼らの中に住んでおられるイエスこそが彼らの信仰の中心となったからである。

それだけでなく、彼らのうちに住まわれる聖霊は、イエスが地上におられたとき以上に、イエスの

心、思い、人格のすべてを弟子たちに啓示してくれたのだ。「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたに話したすべてのことを思い起こさせてください」

先週の出席

「その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます」

以上のイエスの言葉がすべて実現した時、弟子たちは、

「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです」とおっしゃったイエスの言葉を理解したことだろう。(続)

今日の礼拝

○第一礼拝は午前10時から、第二礼拝は午前11時から。

○教会学校は午前10時から。○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は岩崎宏志さん、奏楽は吉岡隆夫さん。

○説教は米村牧師。申命記一九

の一、四の言葉から。過つて罪を犯した人をかくまうために「のれの町」を設けよという神の命令について。

キリスト教との出会い③

三浦 桂

米村さんから聞いた御言葉や家族に支えられながら無事社会復帰し、二年後に結婚、そして翌年に長女の穂乃果が生まれました。

娘を産んで人生のステージが変わり、私は自分の子育ての軸となるような何かを求めて、様々な育児本やノウハウ本などを読み漁りました。

が、どれもじっくりくもるものがなく、三年ほど「子育て」という大きな森の中で迷子状態でした。落ち着いて前へ進むためのコンパスが必要だったのです。

娘が四歳になった頃、アメリカ

の子育てなどに関する本や動画を讀んだり聞いたりしていたある時、ひとりのアメリカ人のお母さんが語られている言葉が耳に留まりました。

「聖書の御言葉を子どもたちに暗唱させることは、子どもの人格形成においてとても重要な要素の一つです。記憶された御言葉は子どもたちを生涯支え、守ってくれるからです」

この言葉を聞いた時、自分自身が米村さんのお話を聞いて立ち直ることができた体験を思い出して、私が求めていたのはこれだったのかと目から鱗でした。このアメリカ人のお母さんは毎朝子どもたちに彼女自身の声で御言葉を語り聞かせ、讃美歌を共に歌い、一日を始めておられました。私にはそれがとても温かく、穏やかで、美しく、清らかなものを感じられたのです。

私はと言えば、毎朝娘の幼稚園のバスに間に合うように急いで朝食を準備し、食べさせ、バタバタと幼稚園へ送り出すという、穏やかで温かい時間とは程遠い朝を過

ごしていました。しかし、ちょうどその頃、コロナ禍によるステイホーム推奨のため、長期間幼稚園をお休みすることにしたので、早速、自分の子育てにも取り入れてみることにしました。そして、毎朝娘と一緒に毎週日曜学校で配られる暗唱聖句を讀み、讃美歌を歌い、一日を始めるとい日々がスタートしました。四、五歳の娘がどこまで理解しているかは測ることはできませんが、それよりもこのことによって生まれた親子の間が本当に貴く愛しく、何より私が御言葉や讃美歌に励まされていることに気がつきました。この頃からより強く天のお父様、イエス様、聖霊様について知りたいという気持ちが湧いてきました。

去年の夏、妹が洗礼を授かりたいと私に打ち明けてくれ、私も同じ気持ちだったので、家族に相談しました。キリスト教に触れたことのない夫がどんな反応をするのか心配でしたが、夫は快く受け入れてくれました。そして二〇二二年九月二五日に洗礼を授かりました。(続)